

アイヌ文化と差別 今に伝える

知里幸恵モデル 映画「カムイのうた」への思いは

あらすじ

大正時代の旭川、学業優秀な北里

テルはアイヌ民族として初めて女子職業学校に入学するが、理不尽な差別といじめに遭う。ある日、東京から

アイヌ語研究第一人者の兼田教授がテルの叔母イヌイエマツのもとを訪れる。教授から神謡「カムイユカラ」

を書き残すことを勧められたテルは、本格的に執筆活動するために上京を決意する。



熊谷洸太撮影

おおつか・ゆきのり 1979年千葉県生まれ。2000年に東川町へ移住。大雪山系を中心に撮影を続ける写真家兼登山ガイド。観光協会、旭岳ビジターセンターなどでの勤務を経て21年に独立。

大塚友記憲さん ー自然や動植物を撮影

菅原浩志監督とは、東川町のPR動画や同町製作の映像作品「ヌプリコロカムイノミ」などで一緒に仕事をしました。今回は、道内の自然風景や動植物の映像を担当しました。製作前に監督から「知里幸恵さんが序文で描いた、100年前の北海道の風景を表現できる映像を撮ってほしい」と依頼されました。映画のロケハン(撮影前の下調べ)にも同行して大雪山系などを一緒に巡りました。

強く希望されたのがシマフクロウです。ただ、森で実物を見つけるのは大変でした。テントで2日間待ち続け、ようやく現れたシマフクロウは別格の存在感で圧倒されました。あんなに大きな鳥が悠然と木に止まり、夜になって「ポーッ」と鳴く…。まさに「森の神」のように感じました。

昨年5月、大雪山系の小川で水中に生えたバイカモを夢中で撮影していたところ、ふと顔を上げると、遠くにヒグマの姿が見えました。慌ててレンズを付け替え、気がつかれないように後を追いました。緊迫感のある撮影でした。ドローンを用いた撮影もしました。木が大きく揺れるほどの吹雪となった旭岳など、ドローンでしか撮れない景色があった。魚を捕るシマフクロウの視点をイメージし、道東の小川を低空で撮影したシーンもあります。

映画は、今ある環境を映像で残すという意味もあると思います。100年後の人たちに今の北海道の風景を知ってもらえる。今回は後世に残す価値ある映像を撮れたと思います。

多様性の時代こそ知るべき

100年前の風景 映像で表現

大正期のアイヌ文化伝承者で、旭川で幼少期を過ごした知里幸恵(1903〜22年)をモデルとした映画「カムイのうた」。昨年11月に道内各地で先行上映し、今月からは全国で順次公開される。旭川面などで連載した出演者や監督らへのインタビュー記事を再構成、作品への思いや撮影時のエピソードなどをまとめた。

(旭川報道部 和泉優大)